

2014 年度 事業報告



公益財団法人知床財団

公	益	事	業
---	---	---	---

公1：普及対策系事業（独自事業）

I.	野生生物との共存のための啓発業務	3
1.	地域向け環境教育	3
II.	国立公園利用者サービス業務	4
1.	ビジター向けインフォメーション・環境教育業務	4
2.	知床自然センター内外刷新業務	5
3.	ルサフィールドハウス周辺整備構想検討業務	5
4.	知床国立公園指定50周年記念シンポジウム	5
III.	情報発信・賛助会員拡大業務	6
1.	地域向け情報発信	6
2.	一般向け情報発信	6
3.	ホームページ等インターネットを活用した広報の強化	6
IV.	賛助会員運営業務	7
1.	会報誌の発行	7
2.	賛助会員の管理	7
3.	寄付、賛助会員拡大推進	7
V.	人材育成業務	7
1.	ボランティア活動推進業務	7
2.	人材育成・就業体験受入業務	8
3.	スタッフ研修業務	8

公2：施設管理系事業（受託事業）

I.	知床自然センター等管理運営業務	9
II.	羅臼ビジターセンター管理運営業務	9
III.	ルサフィールドハウス管理運営業務	9

公3：調査研究系事業

I.	独自調査研究事業（独自事業）	10
1.	エゾシカ個体群の動態に関する調査業務	10
2.	幌別ー岩尾別地区におけるヒグマの生態等に関する調査業務	10
3.	ルシャ地区におけるヒグマの生態等に関する調査業務	10
4.	知床の暮らしと生き物を守る電気柵導入試験業務	10
5.	希少鳥類などの長期モニタリング業務	11
6.	海生哺乳類モニタリング業務	11
7.	水域における生物群	11
8.	学術的な交流と成果	11

9.	シホテアリン世界遺産交流業務	12
10.	ヒグマ対策手法の開発	12
11.	知床GISデータベースの作成	13
12.	羅臼町におけるオオセグロカモメ生態調査業務	13
II.	斜里町及び羅臼町におけるヒグマ・自然環境管理対策事業	13
1.	ヒグマ対策業務	13
2.	自然環境管理対策業務	14
III.	野生生物管理事業	15
1.	知床国立公園・国指定知床鳥獣保護区における利用の適正化と野生動物との共生を推進する業務	15
2.	外来生物の調査・対策業務	15
3.	エゾシカ生息密度操作関係業務	15
IV.	遺産地域調査事業	15
1.	エゾシカの採食による植生への影響調査業務	15
2.	サケ科魚類の遡上状況調査業務	16
3.	海域利用適正化推進業務	16
4.	エゾシカ航空カウント調査業務	16
V.	科学委員会等運営事業	17
VI.	自動車規制管理運営事業	17
VII.	知床エコツアーリズム総合推進事業（独自事業）	17
VIII.	知床五湖関連業務	18

公4：森林再生系事業

I.	しれとこ100平方メートル運動地における森林再生業務（受託事業）	19
1.	森林再生推進業務	19
2.	岩尾別川再生業務	20
II.	しれとこ100平方メートル運動に関わる普及推進及び調査事業（独自事業）	21
1.	普及推進業務	21
2.	岩尾別川における基礎調査及び生物相復元	21

収	益	事	業
---	---	---	---

収1：収益事業

I.	販売・有償貸出業務	23
II.	研修実習受入業務	23

他1：その他収益事業

I.	JBN業務	25
----	-------	----

法	人	会	計
---	---	---	---

法 1 : 財団法人管理運営事業

I. 財団法人管理運営業務..... 25

公 1 : 普及対策系事業 (独自事業)

I. 野生生物との共存のための啓発業務

1. 地域向け環境教育

① 野生生物との共存への理解を推進する教育

ウトロ小中学校全校児童・生徒を対象とした、また、川上小学校の全校児童を対象としたクマ授業を実施しました。

また昨年度からの新しい試みとして、知床財団が行うヒグマ対策活動に対し、住民の理解と協力を得ることを目標に、お茶とお菓子をいただきながら、職員とウトロ住民が直接意見交換をする「クマ端会議」と題した場を今年も設けました。ヒグマ対策について日ごろ抱いている疑問や質問など、ウトロ住民の生の声を聴くことのできる機会となりました。

羅臼町では、中学校・高校一貫教育のカリキュラムとして継続して行っているヒグマ授業を、計 5 回実施しました。中学 1 年生、中学 3 年生、高校 2 年生の全生徒を対象に、各学校に出向いて授業を行ったほか、昨年度から羅臼町内の全幼稚園でのヒグマ授業も実施しています。また、町内に 2 つあるうちのひとつ、春松小学校 5 年生を対象にしたクマ学習も実施しました。

② 地域の自然への関心を高める教育

ウトロ小学校の総合学習の一環として、秋から冬にかけて 1～2 年生、3～4 年生、5～6 年生を対象とした環境教育授業をそれぞれ実施しました。

羅臼中学校 2 年生の総合学習の時間では、「ふるさと調べ学習」の講師として知床の生き物に関する授業を 2 回実施しました。

羅臼町公民館などと共に羅臼町内の小学生を対象にして実施している知床キッズ（羅臼町ふるさと体験教室）は、5 月から 2 月までの間に計 10 回の講座を企画しました。今年度は、ウトロの愛護少年団との交流事業を企画、実施しました。プログラムは羅臼とウトロでそれぞれ実施し、6 月には羅臼から船に乗り知床岬へ出かけてゴミ拾い活動を行いました。7 月には、ウトロのチャシコツ崎で浅瀬の生き物を学習しました。

③ 学習教材開発・運用業務

今年度、ヒグマ学習教材トランクキット 1 号機の貸出実績は 8 件、2 号機の貸出実績は 7 件となりました。貸出し出張期間以外では、職員がヒグマ授業や、広報イベント、知床自然センター内での観光客向けレクチャー、町民への普及活動などに活用しています。

昨年度に立ち上げた海獣版のトランクキット作成プロジェクトは、引き続き作業を

進めています。

Ⅱ． 国立公園利用者サービス業務

1. ビジター向けインフォメーション・環境教育業務

① 知床自然センター

レクチャーの実施

ゴールデンウィークや夏休み期間中、知床の自然の魅力や課題を分かりやすく伝えるミニレクチャーを 28 回実施し、415 人の参加がありました。また、職員が日ごろ撮りためた写真や動画を使ったスライドレクチャーや、雨天時や観光船欠航時にゲリラ的に行うレクチャーなど、様々なレクチャーを実施しました。

地域で取り組む知床ヒグマエサやり禁止キャンペーンの一環として、メッセージボードを館内に掲示し、241 名の方々に参加していただきました。ヒグマと人との共存についての特別展示とモニターを設置し絵本上映も併せて行いました。

ロビー寄付

ゴールデンウィークと夏休み期間中に毎日実施したミニレクチャーや館内繁忙期に行う館内ゲリラレクチャーでは、知床の自然の素晴らしさを紹介すると同時に、知床財団の活動を紹介して積極的に募金を呼びかけました。この他、シカ角の破片やダイナビジョンフィルムを加工したハンドメイドのしおり等を置いて、募金のお礼の品としました。その結果、今年度は 619,956 円の募金をいただきました。

ビジター向け情報の収集・整理

フレペの滝遊歩道、および知床自然センター周辺における自然情報収集を定期的に実施し、インフォメーション業務や自然情報ブログ、館内展示に積極的に反映させました。収集した情報をもとに自然情報ブログではリアルタイムな開花情報を公開し、館内には新たな展示物として花暦を作成しました。

② 羅臼ビジターセンター

来館者に対し、施設周辺の自然情報やヒグマに関する注意喚起、野生動物に接する際のルールとマナーなどを説明するミニレクチャーを実施しました。ミニレクチャーでは、展示などを活用しながら、ストーリー性のある自然解説が好評でした。野生動物の生態や生活史はもちろん、近年顕在化している野生動物への餌付けや餌やりの影響など、人間の行動に起因する課題も取り入れて、奥行きを持たせたものにするよう努めました。

実施は、特に来館者が多く見込める夏休み期間に集中して行い、計 14 回、315 人の方にご参加いただきました。

③ ルサフィールドハウス

知床半島中央部地区及び先端部地区利用者に対し、立ち入る際の留意事項と禁止事項等についてレクチャーを実施しました。一般来館者へは施設展示を活用しながら、数多くの鯨類が利用している羅臼の海の豊かさ、新しく展示物を作成した昆布漁等について解説を実施しました。

④ 五湖フィールドハウス

知床五湖利用調整地区の指定認定機関として4月から10月まで職員が常駐しました。散策路の環境や位置関係が一目でわかるように園地全体のジオラマを館内に設置し、制度説明や遊歩道の状況、自然情報の提供に活用しました。また、来館者の多様なニーズに対応するため、制度案内の英語表記ポスター、知床半島とその主要拠点を示した観光関連の展示、等身大ヒグマの展示を新たに作成し、情報提供の強化に努めました。

また、知床ガイド協議会と協力し、ガイドツアー情報や当日のツアー参加希望者へのサービスを充実させました。

2. 知床自然センター内外刷新業務

館内では、昨年に引き続き、知床財団スタッフ手作りの自然紹介「柱展示」を新たに4作品作成し、1月30日から公開しました。また、施設リニューアルの先行として、1～2月にトイレの改修工事を行いました。自然センター内外での取り組みとして10月14日から31日までの期間、ホロベツ地区の魅力アップとしれとこ100平方メートル運動地の公開を目的に複数の遊歩道（トレイル）を試験的に設置する社会実験を実施しました。遊歩道はすべて100平方メートル運動地内に設置し、名称を「森づくりの道」としました。最も長いロングコースは、5kmほどの距離がある本格的なトレッキングコースとなりました。また、知床自然センターでは、散策前の事前レクチャーを定期的に行い、ヒグマに関する安全対策や100平方メートル運動の普及を図る取り組みを行いました。期間中、500名以上の利用者が新コースを散策し、ホロベツ地区の歴史と自然保護の歩みを伝える取り組みとして好評を得ることができました。

3. ルサフィールドハウス周辺整備構想検討業務

ルサフィールドハウス周辺の将来的な整備に関して、理想的なあり方を検討するための情報収集と構想の検討を行っています。今年度は、二つのチームに分かれて検討を行い、その結果を3月21日の理事会においてコンペ形式で発表するという取組を行いました。このコンペのために検討を行った内容を今後の構想へ活かしていきます。

4. 知床国立公園指定50周年記念シンポジウム

11月1日、知床国立公園50周年を記念し、知床自然センターでシンポジウムが開催され、事前広報資料と当日配布パンフレットの作成、講師招聘、当日の運営業務を

環境省 から受託しました。知床財団の独自の取り組みとしてシンポジウムのパネリストとして 2 名 が参加し、休憩時にはダイナビジョン館でレクチャーを実施しました。また、知床の山と海の幸をふんだんに取り入れたフレンチをビュッフェ スタイルで提供する昼食をプロデュースしました。

Ⅲ. 情報発信・賛助会員拡大業務

1. 地域向け情報発信

知床財団の活動に対する理解と協力を得るために、地元やその他の地域に向けて財団活動紹介を行っています。地元の斜里・羅臼両町民向けには、2009 年度より知床の旬の自然情報や当財団の活動・イベント情報をお知らせする「知床財団だより」を発行しています。今年度は 2 ヶ月に 1 回、斜里・羅臼両町の広報誌に折り込みました。(発行部数：斜里町 5,050 部、羅臼町 2,050 部)。

知床自然センターの展示やイベント、最新の取り組みを紹介する「知床自然センターだより」を作成しました。同たよりは、A4 サイズ白黒で、ラミネート加工したものをウトロの宿泊施設および観光関係施設（全 27 施設）に配布しており、宿泊者への情報提供に役立てていただいています。

2. 一般向け情報発信

会報誌 SEEDS を活用して、観光客を対象とした知床財団の PR や賛助会員獲得に向けた広報を展開しています。2011 年の夏より、斜里・羅臼両町の宿泊施設にご協力いただき、SEEDS を町内の旅館やホテルなどの宿泊施設に置かせていただいているほか、賛助会員募集パンフレットを地元の旅館のロビーなどに置かせていただいています。

協定先の旭川市旭山動物園には、知床財団の活動紹介パネル等が展示されています。また、図書館には賛助会員募集のパンフレットや SEEDS のバックナンバーファイルが設置されており、知床財団活動の PR、賛助会員獲得にむけた広報にご協力いただいています。

3. ホームページ等インターネットを活用した広報の強化

知床財団の活動に対する理解と支援の輪を広げるための「伝える活動」として、ホームページでの情報発信を継続して行っています。知床財団と知床自然センターのホームページをそれぞれ独立させてから 1 年が経ち、各ホームページに特化した内容を効果的に発信することができるようになり、知床財団の主要な情報発信ツールとなっています。今年度は閲覧者にとってより利便性の高いツールとなるよう、積極的に利用者の意見を取り入れ、改良に努めました。

また、知床のヒグマ対策について HP 上でわかりやすく紹介できるように、掲載内容の検討を行いました。

IV. 賛助会員運營業務

1. 会報誌の発行

賛助会員向けの会報誌である知床自然情報紙「SEEDS」を4回発行、会員の皆様や関係機関の方に発送しました。

2. 賛助会員の管理

今年度の新規の入会状況は、年個人会員110件（前年度100件）、個人終身会員15件（前年度6件）、年法人会員は3件（前年度1団体）、法人特別年会員は1（前年度1団体）件でした。個人会員、個人終身会員、法人会員は、昨年度を上回る結果となりました。

3. 寄付、賛助会員拡大推進

知床財団の活動をひろく一般の方や企業へPRし寄付拡大へとつなげるため、東京で開催された国内最大級の環境イベント「エコプロダクツ展」に出展しました。エコプロダクツ展への出展は、昨年を引き続き2年目です。開催期間3日間の来場者総数は、16万人を超えました。イベントでは約150枚の職員の名刺を配布したほか、活動内容を分かりやすく伝えるための資料を新たに作成して設置したり、SEEDSのバックナンバーを配布したりするなど、知床財団の知名度の向上と活動への理解に努めました。またブース内に設置した募金箱には、来場者の方から54,274円のご寄附をいただきました。

知床自然センター・羅臼ビジターセンターの館内展示や知床財団ホームページでは、賛助会員募集や寄附の呼びかけ、寄附のお礼の掲載などに力を入れました。また、地元への活動のPRの場として、町内のイベントに出展し知床財団が行なっている活動内容の普及に努めました。

今年度、個人寄附としてお寄せ頂いた金額は2,342,105円となりました。法人寄附としてダイキン工業株式会社様、アサヒビール株式会社様、ブラックダイヤモンドジャパン様、他7社から総額10,308,434円の寄附をいただきました。

V. 人材育成業務

1. ボランティア活動推進業務

昨年度末でのボランティア登録者数は161名、その内の28名の皆さんが「100平方メートル運動の森・トラスト」の現場での森づくりや羅臼ビジターセンターを拠点にした展示物作成作業などに参加してくださいました。年齢層は10代から60代まで幅広く、道内のみならず遠くは関東や関西からも駆けつけていただきました。今年度、総活動日数は62日間、延べ参加人数は110人日となりました。

2. 人材育成・就業体験受入業務

環境教育や調査研究、公園管理の現場で活躍する人材の教育、育成のため、インターンシップ（就業体験）の受け入れを行いました。主に野生動物や環境保全を専攻する全国の学生から応募があり、夏冬合わせて9教育機関よりのべ14名の受け入れを実施しました。夏のインターンシップに参加した学生のうち2名が、冬のインターンシップにも参加、体験の内容にも手ごたえを感じています。

3. スタッフ研修業務

2014年9月13日、日本ファンドレイジング協会が主催する「准認定ファンドレイザー必修研修」に職員2名が参加しました。今後の賛助会員拡大や寄付獲得に活かすべく、寄付をもらうためのツールや戦略づくりなどについて学びました。

自然環境の解析や情報発信に活用が期待されている地理情報システム(GIS)の技術習得に取り組んでおり、2014年9月25日に札幌で開催されたGISコミュニティーフォーラムに2名、2014年12月4、5日に知床博物館で開催された講習会に3名が参加しました。

I. 知床自然センター等管理運営業務

知床自然センター及び周辺施設の維持管理、映像展示館（ダイナビジョン館）の運営と料金徴収等の業務を行いました。今年度の知床自然センター入館者数は 170,321 人で、前年比 110.3%となりました（80% 補正值）。映像展示館入館者数は 20, 541 人（前年比 117.3%）、売上は 7,319,845 円（前年比 116.2%）であり、いずれも前年値を上回りました。

その他、知床自然教育研修所の維持管理を行いました。今年度は、外部研究者やボランティア活動参加者を中心に 1,229 人泊の利用があり、521,800 円を施設利用料金として徴収しました。

II. 羅臼ビジターセンター管理運営業務

今年度の羅臼ビジターセンターの来館者数は 35,336 名で、前年度比 102%でした。例年開催している自然観察会を 4 回、特別展示を 7 回開催しました。自然観察会には羅臼町民を中心に各回 5 名前後の参加者がありました。

また、館内での自然に関する解説や情報提供等に活用するために、知床国立公園内の羅臼町側の主要な利用拠点（羅臼湖、羅臼岳・知床連山、熊越えの滝、羅臼温泉園地等）の自然情報、利用状況や野生動物の生息状況等を収集する巡視活動を実施しました。また、救急救命講習会を実施し、AED の取扱いの実習についても行いました。

さらに、羅臼研究支援センターでは施設の維持管理のほか、受付や協力金徴収を行いました。2014 年度は大学教授や大学生、知床財団のインターン、ボランティアを中心にのべ 67 名、623 泊の利用がありました。

III. ルサフィールドハウス管理運営業務

ルサフィールドハウスは、今年度についても 11 月から 1 月の 3 か月間を除く 4 月から 10 月、及び 2 月から 3 月の 9 か月間に開館しました。9 か月間の開館日のうち、計 19 日（終日 12 日、時間閉鎖 7 日）が台風や暴風雪のため臨時休館となりました。来館者数は 6,275 人で、前年度比は 97%でした。知床半島先端部地区へ立ち入る利用者に対しては、引き続きルールを含めた最新情報や留意点等についてレクチャー（1 回につき、30～40 分）しました。今年度は 29 名に対し 15 回のレクチャーを行いました。

I. 独自調査研究事業 (独自事業)

1. エゾシカ個体群の動態に関する調査業務

知床半島内の重要なエゾシカ越冬地の一つとなっている斜里町真鯉地区において、国道上からのエゾシカ日中カウントを冬期間に計 6 回実施しました。シカの確認頭数は 3 月中旬が最多となり、238 頭でした。最大確認頭数は 2012 年度が 517 頭、昨年度が 472 頭でしたので、同地区のシカは依然高密度状態を維持しているものの、減少傾向と考えられます。なお鳥獣保護区外での発見割合は、2 月末に狩猟期が終了した後、急増していました。また、遺産地域内におけるエゾシカ捕獲（環境省事業）などによるエゾシカの行動変化を把握するため 2012 年度の冬に GPS 首輪を装着した個体（メス成獣 1 頭）の追跡を引き続き実施しました。斜里町側の幌別―岩尾別地区で捕獲されたこの個体は、2 年連続で盛夏に高標高へ移動（山登り）していました。

2. 幌別―岩尾別地区におけるヒグマの生態等に関する調査業務

今年度は秋に箱ワナによるヒグマの生体捕獲を試みましたが、捕獲できませんでした。しかし箱ワナに仕掛けていた自動撮影カメラにより、前年度追跡していたメス成獣 1 頭（13B03）が子グマを連れて行動していたことが確認されました。なおこの個体の GPS 首輪は、盤ノ川上流の標高 990 m 地点の冬眠穴入口で脱落していたのを 7 月上旬に回収しました。また、外見のみでは個体識別が曖昧だったヒグマのベ 4 頭について麻酔銃による組織採取を行ない、遺伝子分析による結果を得ました（北大獣医学部との共同）。さらに、有害捕獲等で得られたヒグマの頭骨 10 個体分について標本を作製しました。

3. ルシャ地区におけるヒグマの生態等に関する調査業務

斜里町ルシャ地区を利用するヒグマを、目視と遺伝子分析（分析試料はヘアトラップにより採取した体毛、麻酔銃ダートバイオプシーによる皮膚組織片、回収した新鮮クマ糞など）によって個体識別し、個体間の血縁関係やルシャ地区の外への移動分散状況などを引き続き調査しました。また自由に野外を歩き回っている 7 頭のヒグマ（メス成獣 4 頭を含む）を麻酔銃で生け捕りにし、GPS 首輪を装着して放獣することにも成功しました。2014 年に斜里町と羅臼町で捕獲されたヒグマ 19 頭のうち、2 頭がルシャ生まれの若いオスでした（ダイキン工業寄付金事業：北大・知床博物館との共同）。

4. 知床の暮らしと生き物を守る電気柵導入試験業務

知床岬先端部にある斜里側文吉湾と羅臼側赤岩地区の漁業番屋へは、ヒグマが出没してもすぐに駆けつけることができず、対策に苦慮していました。そこで一昨年アサヒビール株式会社様からの支援により、ヒグマを近づけないための電気柵を設置しています。今年度は文吉湾では、冬の間撤去していた電気柵を 5/30 に再設置し、9/29 に

再び撤去しました。赤岩地区でも、昆布漁期に合わせて 7/5 に再設置し、8/30 に撤去しました。電気柵は忌避する一方で、昆布番屋周辺からは離れないような行動をとる個体が観察されました。

5. 希少鳥類などの長期モニタリング業務

知床のオジロワシの繁殖状況に関わる調査員によって構成されている「オジロワシ長期モニタリンググループ」の事務局を引き続き担い、情報の集約と会議運営をしました。当財団が調査担当となっている営巣木については、当年の営巣の有無や雛数等について情報収集しました。また、冬期のオジロワシ・オオワシ飛来状況の長期変動傾向を把握するため、羅臼町の海沿いで計数調査を実施しました。

6. 海生哺乳類モニタリング業務

冬期にトドの来遊海域となっている羅臼町から標津町北部の沿岸において、陸上の定点からのカウント調査を継続しました。今年度冬期の最大確認頭数は、2015年1月26日の103頭でした。前年度までと同様に、中部千島生まれの標識個体が多数確認されました。またドローン（無人航空機）による遊泳群の上空からの撮影も3日間実施し、無風時には群れ構成や標識個体を効率よく把握できることがわかりました。

7. 水域における生物群集モニタリング業務

漁業が盛んな羅臼沖深海域の生物相を把握するため、深層水の汲み上げ施設で昨年度に引き続き生物を収集しました。収集した生物のうち、特に貝類について学会発表と学術誌掲載へ向けた同定を進めました。また、一昨年に国後島と択捉島で採集した魚類と貝類についても同定を進め、学会発表に向けた準備を進めました。

8. 学術的な交流と成果公表に関する業務

学会発表

○知床岬のトリ事情シカ事情ーシカによる草地景観の改変と鳥類相変化ー 上原裕世（酪農大院）、石名坂豪（知床財団）、田澤道広（羅臼町）、中川元（知床博）、吉田剛司（酪農大） 日本景観生態学会 金沢市地場産業振興センター（金沢） 2014年6月

○知床半島ルシャ地区におけるヒグマの繁殖様式に関する研究 下鶴倫人、森脇潤（北大獣医）、山中正実（知床博）、中西將尚、石名坂豪、葛西真輔、能勢峰、増田泰（知床財団）、坪田敏男（北大獣医） 日本獣医学会 北海道大学（札幌） 2014年9月

○エゾシカの個体数変動に伴う体重と体サイズの変化. 邑上亮真（東京農工大）、能勢峰、石名坂 豪、増田泰、中西將尚（知床財団）、岡田秀明（斜里町）、山中正実（知床博）、梶光一（東京農工大） 日本生態学会 鹿児島大学（鹿児島） 2015年3月

学会ポスター発表

○日本に生息する猛禽類における鉛汚染状況の解析

石井千尋（北大獣医）・池中良徳・中川翔太・水川葉月（北大獣医）・齊藤慶輔・渡邊有希子（猛禽類医学研究所）・田辺信介・野見山桂（愛媛大）・林光武（栃木県博）・増田 泰（知床財団）・坂本健太郎・石塚真由美（北大獣医） 日本毒性学会 神戸コンベンションセンター（神戸） 2014年7月

○レーザーアブレーション誘導結合プラズマ質量分析による野生動物の食性解析の可能性

中下留美子（森林総研）・大石昌弘（㈱TDK）・鈴木彌生子（食総研）・小林喬子（自然研）・伊藤哲治（㈱WMO）・増田泰（知床財団）・大泰司紀之（北大）・佐藤喜和（酪農大）日本哺乳類学会 京都大学（京都） 2014年9月

○Species composition of grassland songbirds in hyper-abundant deer landscape.

Hiroyo Uehara, Hajime Nakagawa, Michihiro Tazawa, Tsuyoshi Ishinazaka, Tsuyoshi Yoshida The Wildlife Society annual conference 2014 Pittsburgh, PA, USA. 2014年10月

学会シンポジウム

○環境変化が野生動物へ与える影響 増田泰（知床財団） 公衆衛生分科会・野生動物分科会ジョイントシンポジウム「環オホーツクにおける環境変化が野生動物と人に及ぼす影響」 日本獣医学会 北海道大学（札幌） 2014年9月

紀要・報告書

○馬谷佳幸, 松林良太, 増田泰（2014）知床半島岩尾別川および幌別川におけるサクラマス個体群の現状—100平方メートル運動の森・トラストでの生物相復元の取り組み. 知床博物館研究報告 37: 21-32.

知床ゼミ

外部研究者や職員を発表者とした勉強会を計10回開催しました。当財団スタッフや関係機関等を含め、のべ150名ほどの参加がありました。

9. シホテアリン世界遺産交流業務

2014年9月に、ロシア沿海州およびハバロフスク地方でユーラシアカワウソ調査を実施し、シホテアリン自然保護区内でも調査や職員の皆さんとの交流を行ないました。また学術協力のための協定書を取り交わしました。なお、この調査はダイキン工業株式会社様からいただいた寄付金により実施しました。

10. ヒグマ対策手法の開発

昨年度に引き続き、出没を繰り返すヒグマが同じ個体か判断するための簡易な標識

付け手段として、ヒグマを着色する方法を検討しました。今年度は、スリングショットでペイントボールを発射することは可能か、また、動物に直接当てることで着色させられるかを試行しました。ペイントボールはスリングショットで発射可能なことが確認されましたが、動物の近くの硬いものに当てて破裂させた方が着色させやすいことが分かりました。

1 1. 知床 GIS データベースの作成

知床半島の自然情報、位置情報をキーとしているあらゆるデータを取りまとめる GIS データベースの構築を進めています。今年度は 9 月に札幌で開催された GIS コミュニティフォーラムにおいて情報収集を行い、その結果をもとに GIS データベースの設計、GIS データの作成、テストサイトの作成を行いました。

1 2. 羅臼町におけるオオセグロカモメ生態調査業務

人家の屋根等で営巣して糞や騒音が問題となっている羅臼町のオオセグロカモメについて、営巣数調査や行動追跡調査等を実施しました。営巣数調査では、321 巣を人家の屋根で記録しました。また行動追跡調査では、成鳥と幼鳥の計 62 個体に足環を装着し、うちカラーリングで標識した 30 個体の目撃情報を収集した結果、繁殖が終わった 9 月以降にローソク岩や羅臼漁港付近で 5 個体の目撃があった他、11 月に網走まで移動した個体がいることがわかりました。

II. 斜里町及び羅臼町におけるヒグマ・自然環境管理対策事業

1. ヒグマ対策業務

斜里町

今年度のヒグマ目撃件数は 785 件、対策活動が 651 件で、近年では平均的な年でした。ただし 4 月のみで目撃件数が 100 件を越え、早春からヒグマの活動が活発だったのが特徴的でした。ヒグマによる人身事故は発生しませんが、前年度に国立公園内において常態的に写真撮影の対象となって人馴れが進行したと考えられる複数の個体が、国立公園外の住宅付近にも出没しました。最終的にこのうちの 1 頭が峰浜地区で有害捕獲されました。また、岩尾別台地の道道沿いには 0 歳の子グマを 3 頭連れた大型の母グマが頻繁に現われ、人間に対して威嚇突進を繰り返す危険な状況が発生しました。各地区の農地では 6 月中旬以降に作物被害が発生し、計 7 頭が有害捕獲されました。

羅臼町

今年度のヒグマ目撃件数は 108 件、対策活動は 110 件でした。どちらも昨年度から若干増加しました。また、有害捕獲頭数は 5 頭でした。ヒグマの目撃および対策活動件数は、詳細な統計をとり始めた 2007 年度から増減を繰り返しながら徐々に増加して

おり、2012 度に過去最多となりましたが、昨年度に急減し、今年度についてもほぼ同水準で横ばいです。

月別では、7 月に最も多くの目撃があり、対策活動についても同じく最多となりました。これは、麻布町や春日町の住宅地に出没したヒグマへの対応や、岬町の知円別地区に夜間出没したヒグマへの対応が多かったためでした。

羅臼町では、2011 年度からダイキン工業株式会社様からの寄付を受けた羅臼町が順次電気柵の設置を進めています。知床財団は、これら電気柵の設置を羅臼町からの業務委託を受け実施しています。今年度は、市街地北側（船見町から栄町）に野生動物対策フェンスおよび電気柵を新設しました。

2. 自然環境管理対策業務

斜里町

ゴミの不法投棄は 15 件あり、多くは食品の包装や容器などでした。国立公園内の幌別地区では家電製品（電子レンジ）が不法投棄されていた事例もありました。キツネなど野生動物への餌やり行為は、直接職員が目撃した事例はありませんでしたが、キツネの行動を見る限り未だなくなっておらず、継続的な普及啓発が必要な状況です。サケ・マスの遡上シーズンになると遠音別川などの河口付近の駐車帯に車内泊をする釣り人が増え、ゴミや糞尿の放置が問題となったため、注意看板を設置しました。なお本年度からフンベ川河口の駐車帯も幌別川と同様に閉鎖期間が設けられました。

野生鳥獣死体の処理件数は 55 件あり、エゾシカが 20 件で最多でした。3 月中旬にアトリの交通事故死体が短期間で集中的に回収されたことも特徴的でした。傷病鳥獣については 16 件対応しました。8 月に希少種のオジロワシの幼鳥を一時的に保護収容したケースがありました。また 11 月には斜里町港町の市街地に出現したトドの生け捕り対応を各機関と協力して実施したケースもありました。

羅臼町

傷病鳥獣の対応は 20 件ありました。希少鳥類のオオワシとオジロワシへの対応は計 4 件ありました。また、特定外来生物に関する情報収集や捕獲作業を行いました。アライグマの目撃情報は 3 件ありましたが、捕獲には至りませんでした。エゾシカのライトカウント調査は、春期と秋期に各 5 回、ルサー相泊地区で継続実施しました。町内各地区で実施した計 31 回のパトロールでは、路上などに不法投棄された食品系ゴミを複数回発見、回収したほか、国立公園利用者の指導も随時実施しました。

Ⅲ. 野生生物管理事業

1. 知床国立公園・国指定知床鳥獣保護区における利用の適正化と野生動物との共生を推進する業務

斜里町

ヒグマ生息状況の調査として、ウトロの観光船から運航中に得られた目撃情報の集計を行いました。2014年の目撃件数は949件で、ほぼ前年並みでした。

6月1日から11月30日の間、巡回員1名が国立公園内をパトロールし、自然保護監視や公園利用者への普及啓発活動を行いました。特に、前年秋にカメラマンと人慣れヒグマの問題が顕在化した岩尾別温泉道路においては、監視小屋周辺等でカメラマン対策を実施しました。

羅臼町

羅臼町内の国立公園内3か所にヒグマ出没に関する注意看板を設置しました。また、希少猛禽類の重要餌資源となっているオショロコマを保全するため、釣り人に向けたキャッチ&リリース看板を羅臼町内主要河川の7か所に設置し、いずれも積雪期前に撤去しました。

2. 外来生物の調査・対策業務

今年度は行政からの受託事業としての実施はありませんでしたが、国立公園内外における日常的なパトロールの際にアメリカオニアザミやセイヨウオオマルハナバチを発見した場合は、駆除・捕獲を行ないました。

3. エゾシカ生息密度操作関係業務

今年度も冬期間の一大事業としてエゾシカ捕獲に取り組みました。岩尾別大型仕切柵を含めて囲いわなを7基稼働させ、流し猟式シャープシューティング（道路を閉鎖しての銃捕獲）を2か所で行ったほか、厳冬期にヘリコプターで知床岬へ行き、仕切柵を利用した巻狩りも実施して捕獲しました。記録的な大雪や吹雪に悩まされましたが、3月末までに囲いわなで309頭（岩尾別大型仕切柵：82頭（春43頭、冬39頭）、岩尾別河口：22頭、幌別河口：94頭、ウトロ：17頭、フンベ：19頭、オシンコシン：41頭、ルサ：34頭（春4頭、冬30頭））、シャープシューティングで74頭（ルサ・相泊：57頭（春35頭、冬22頭）、岩尾別：17頭（春2頭、冬15頭））、知床岬での巻狩りで66頭（春9頭、冬57頭）の計449頭を捕獲しました。

Ⅳ. 遺産地域調査事業

1. エゾシカの採食による植生への影響調査業務

エゾシカの捕獲事業を知床岬地区、幌別・岩尾別地区およびルサ・相泊地区で実施中

ですが、これら事業の最終的な目的は各地の植生の回復です。その成果を測るため、エゾシカの密度低下後の植生の変化を調べたり、それを長期的に見守るための指標の開発が行われたりしています。本年度当財団では、知床岬地区と幌別・岩尾別地区の調査をサポートしました。また、ルシャ地区において6～11月に計10頭のメスジカを麻酔銃で捕獲し、GPS首輪を装着後再度放獣、行動範囲を調査しました。

2. サケ科魚類の遡上状況調査業務

知床が遺産地域登録されてから改良が進められたダムについて、改良効果検証に関する調査を行ないました。羅臼町側のサシルイ川とチエンベツ川、斜里町側のルシャ川を対象とし、ダムの上流側と下流側でシロザケとカラフトマスの産卵床数をカウントしました。羅臼町側の2河川については改良前よりも上流で産卵床が確認されました。一方でルシャ川についてはダム下流側の河川形状が度重なる増水により変化し、改良後から次第に河床が低くなってしまいました。そのため、ダムの落差が大きくなりシロザケが遡上できない状態になっており、ダムの上流側に産卵床を確認することはできませんでした。

3. 海域利用適正化推進業務

知床国立公園やその周辺海域の適正な利用を図るため、当該海域においてホエール・バードウォッチングを行う観光船に専門家と同乗し、観光船が作成したホエールウォッチング自主ルールの遵守状況や船の運航上の改善点、レクチャーの実施状況等を調査しました。また、関係団体への電話ヒアリングや文献調査を行い、自主ルールを守る仕組みについて国内外の事例を取りまとめました。冬期には当該海域における観光船によるワシ類への餌付けに関する調査、モニタリング手法の検討及び立案、羅臼の海域利用に関する懇談会の運営を実施しました。調査は、観光船に同乗して行う船上調査と、陸上からのロードサイドセンサスを計6日間行いました。また、「羅臼町の海域に関する懇談会」を1月と2月に1回ずつ開催し、関係者間で意見交換を行いました。

4. エゾシカ航空カウント調査業務

遺産地域内でエゾシカの捕獲事業を実施している3地区（知床岬地区、幌別・岩尾別地区およびルサ・相泊地区）と、数年後に捕獲事業を開始する可能性を検討中のルシャ地区において、2015年3月上旬にエゾシカの航空カウント調査を実施しました。積雪期にヘリコプターで低空・低速飛行する方式による調査は、2003年、2011年、2013年、昨年2014年にひきつづき5回目となります。本年度は遺産地域内の上記4地区（計97.4 km²）全体で811頭のエゾシカを発見しました。これは前年度比で124頭減でした。

V. 科学委員会等運営事業

知床世界自然遺産地域を適切に管理するために、科学的な見地からの行政への助言が科学委員会会議やその附属会議によって行われています。当財団は科学委員会（7/11 羅臼町、2/26 札幌市）とエゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ会議（7/12、10/1、ともに釧路市）の運営事務局として、日程調整、会場準備、資料作成、議事録作成、地元向けニュースレター作成などを担いました。

VI. 自動車規制管理運営事業

2014 年度もカムイワッカ地区は、マイカー規制期間と自由通行期間が交互に切り替わる利用体制となり、現地での混乱を避けるため関係者間の調整が必要でした。同地区で行われているマイカー規制の現地連絡調整業務を自動車利用適正化対策連絡協議会から受託し、知床五湖フィールドハウスを拠点に、運営の円滑化のためにバス会社や各地に配置された警備員や巡視員との連絡調整、利用状況の調査や利用者への情報提供、ヒグマ出没時の連絡整理、負傷者への対応などを行いました。

特に今年度は、硫黄山登山者（知床連山縦走含む）の遭難による警察等への救助要請が 6 件発生し、内 4 件に関し、当財団が連絡調整と救助の補助対応を行いました。

VII. 知床エコツーリズム総合推進事業（独自事業）

よりよい公園利用のあり方を目指し様々な協議や試行事業に参加しています。適正利用・エコツーリズム検討会議（世界遺産科学委、利用適正・エコツーリズム WG と地域連絡会議、利用適正・エコツーリズム部会の合同会議）では、知床エコツーリズム戦略の本格的な運用が始まっています。地域提案型の利用のあり方やルール作りの仕組みが確立されつつあり、私たちもこうした取り組みに参画しています。エコツーリズム戦略の提案に基づき、設置された部会全ての議論に参加しています。

また、知床五湖の新たな利用システムを広く地域の皆さんに体験してもらうため、「知床五湖町民ウェルカムキャンペーン」「くまレク見てトクキャンペーン」の 2 企画を昨年より継続して実施しました。ウェルカムキャンペーンでは、斜里・羅臼の両町民に対し、通年で地上遊歩道を無料で楽しめるサービスを提供し、今年度は 267 名の参加がありました。

くまレク見てトクキャンペーンでは、五湖の新制度に賛同する協賛店舗を地域から募集し、地上遊歩道の利用者が協賛店舗で特典を受けられるサービスや利用者が店舗をめぐるクイズラリーを企画しました。昨年を大きく上回る 35 の地元店舗にご協力いただき、3,600 人以上の方がキャンペーンを利用しました。

Ⅷ. 知床五湖関連業務

2011年より開始した知床五湖の利用調整地区制度は4年目を迎えました。新制度はヒグマに関するリスク管理体制、観光地における認定ガイド制度など、様々な面で先進的な取り組みとして注目を集めています。知床財団は制度運営の要となる指定認定機関(環境大臣指定)として制度全体の運用を担っています。

今年度はヒグマ活動期の運用が好調でした。期間中、1万人を超える利用者がガイドツアーに参加しています。知床五湖がエコツアーの発信地となりつつあります。ヒグマの出没も少なく、通年の立ち入り認定者数は6万5000人を超えており、安定的な運用が実現できました。

公 4 : 森林再生系事業

I . しれとこ 100 平方メートル運動地における森林再生業務

(受託事業)

斜里町主催「しれとこ 100 平方メートル運動」の開始から 37 年、新運動「100 平方メートル運動の森・トラスト」として原生の森の再生に向けた取り組みが始まり 17 年が経過しました。この知床の森を守り育てる取り組みの中で、当財団は、森づくりやしれとこの森交流事業など 100 平方メートル運動に関わる現地業務を担っています。

1. 森林再生推進業務

森林再生作業

春から夏にかけて、苗畑での除草や苗木の根づくりを行ったほか、老朽化が進んだ防鹿柵の改修を行いました。秋には、苗畑で育てたミズナラなどの中～大型（樹高 5～10 メートル）の苗木 60 本を防鹿柵の内外に移植しました。その内 18 本は、樹皮保護ネットを巻いて、柵のない場所に植えています。防鹿柵は、森づくりにとって有効な手法ですが、これ以上の拡充には限界があるため、このような柵に頼らない森づくりも進めています。

その他、2 年後の 2017 年には本格的な森づくりを開始してから節目の 20 年を迎えることから、次の 20 年間の方針と目標を策定するために必要な情報収集として運動地各地の現状確認（以下、巡検）を行いました。また、防鹿柵等の各施設位置や過去の植栽履歴など、これまでの森づくりで得た情報を蓄積するために、運動地の GIS 化にも着手しました。

しれとこの森交流事業

森づくりの現場と運動参加者をつなぐ交流事業では、「第 35 回知床自然教室」（7 月 30 日～8 月 5 日、参加者 33 名）、「第 18 回しれとこ森の集い（植樹祭）」（10 月 19 日、参加者 87 名）、「第 18 回森づくりワークキャンプ」（10 月 30 日～11 月 4 日、参加者 13 名）、の企画・運営を行いました。

これまで「森の集い（植樹祭）」では、片手でも持てるサイズの苗木を数百本単位で防鹿柵の中に植えてきましたが、今回は、植樹する面積を少なくするため、大きな苗木を数人一組のグループで植える方法を初めて取り入れました。その結果、植樹本数は少なくなりましたが、参加者の皆さんはグループごとにそれぞれ協力し合い、何本もの大きな苗木を植樹することができました。

森林再生専門委員会議運営

森づくり作業の方針や計画は、動植物の専門家と地元の有識者で構成される森林再生専門委員会議の場で議論が行われその方向性などが定められています。当財団では、

昨年度の活動の成果と課題をまとめるとともに、今年度の森づくり作業の具体的な方針や計画案を斜里町と検討を重ねながら立案しました。

11月に開催した森林再生専門委員会議では、森林再生作業などの進捗のほか、エゾシカ捕獲の影響と推察される植生の回復が運動地でも見られ始めていることを報告しました。また、今年度は、ダイキン工業様からの寄付事業が最終年（5年目）を迎えることから、岩尾別川流域での各作業や調査は、取りまとめを見据えた計画で進めていくことを確認しました。その他、次期20年間の方針と目標策定に向けた巡検の進捗状況の報告を行い、委員からは、今後その結果をGIS等で視覚的にも分かりやすく取りまとめてほしいなどの意見が出されました。

運動地広報企画

100平方メートル運動の広報誌『しれとこの森通信 No.17』（A4判カラー12ページ）の企画・編集作業を行いました。また、斜里町民向けに運動の状況を伝えるチラシ『しれとこの森通信ミニ』（季刊）を作成し、町広報誌に折り込み配布も行っています。

その他、昨年度リニューアルを行った運動ホームページでは、日々の作業状況を発信するとともにイベントやボランティア募集の媒体としても活用しています。

2. 岩尾別川再生業務

本業務では、岩尾別川沿いの河畔林の復元と河川環境の改善に取り組んでいます。これまでも100平方メートル運動では、岩尾別川沿いでも森林再生作業を行ってきましたが、ダイキン工業株式会社様の支援のもと、2011～2015年度の5年間「カツラの森、命あふれる川の復元事業」として、さらに作業を進めています。

4年目に当たる今年度は、岩尾別川沿いの河畔林にて新規の防鹿柵の設置作業に着手しました。柵の規模は、総延長約350mで、2ヵ年での完成を予定しています。今年度は、全体のおよそ6割に当たる200mの区間の設置を完了しました。

その他、これまで育成していたカツラの苗木（177本）を岩尾別川沿いの防鹿柵の中に植え込みました。この苗木は、2012年5月の掘り取りから育成、柵の設置、そして今回の植え込みまでの一連の作業全てにダイキン工業株式会社様の社員の皆さんに関わっていただいています。3年間の時を経て、カツラの苗木を育て、植える作業を完結することができました。

河川環境の改善に向けた取り組みでは、これまで未着手だった「人為的な構造物（土手）の解消」を行いました。この作業は、人為的に積み上げた土手を解消するとともに、人為的に狭められていた河道に動くべき範囲を与え、自然の推移の中でよりダイナミックにこの川に適した環境が形成されていくことを目的としています。その後、数回の増水などを経て、下流側に2股に分かれた流路が形成されるなどの変化が見られ始めています。

なお、本業務はダイキン工業株式会社様との協定に基づく斜里町からの受託事業となっています。

Ⅱ. しれとこ 100 平方メートル運動に関わる普及推進及び調査事業

(独自事業)

本業務は、斜里町主催「100 平方メートル運動の森・トラスト」の安定的な継続と発展を図るため、運動地を含めた運動の普及と推進に、運動の現地業務を担う知床財団が斜里町と連携を図りながら独自事業として取り組んでいるものです。

1. 普及推進業務

2014 年 7 月末より、知床自然センターに隣接する作業地に運動地公開コース「知床森づくりの道」を開設し、知床を訪れるビジターに対し運動と森づくりの普及に努めました。また、10 月には、同コース及び周辺を利用した運動地公開及び幌別地区の利用推進を目的とした社会実験（環境省事業）を行いました。

その他、運動の趣旨に賛同する企業や団体、教育機関を対象に、運動地を歩きながら 100 平方メートル運動や開拓の歴史などを紹介し、そして実際の森づくりの作業も経験する運動地公開プログラムを行いました。地元の斜里高校をはじめ、東京都立南多摩中等教育学校の生徒や日本赤十字北海道看護大学の学生など約 309 名が、知床の森を訪れ、運動と森づくりに触れました。なお、東京都立南多摩中等教育学校の受け入れは今回の 3 回目をもって終了しました。

また、4 泊 5 日の合宿イベント「知床森づくりの日」を計 3 回開催しました。計 15 名の参加があり、作業に汗を流しました。ダイキン工業株式会社様からの支援の一環として、5 月及び 9 月に社員ボランティアの受け入れを行いました。計 22 名が 3 泊 4 日の日程で知床を訪れ、森づくりに関わっていただきました。資金的な支援だけではなく、このような人的な交流を通じて直接現場を知ること、知床の自然を守る活動に対してより深いご理解をいただき、さらなる支援の輪が広がっていくことを期待しています。

2. 岩尾別川における基礎調査及び生物相復元

本事業では、岩尾別川流域で行われる各種作業（「カツラの森、命あふれる川の復元事業」）を科学的な裏付けをもってその成果を検証するため、対象となる生物種や河川環境について、現状把握と河畔林と河川環境の調査を行っています。

また、河川生態系の復元にあたって、100 平方メートル運動において生物相復元対象として認定されているカワウソの復元を将来の究極目標と位置付け、その可能性についての検討を進めています。

今年度は、過去 3 年間に引き続き、同河川の定点観測ポイントにて、魚類の生息状況と河川構造の現状を把握する調査を行いました。また、岩尾別川沿いに設置している防鹿柵内外の植生調査も行っています。これらの調査結果は、今後、河川環境の改善に向けた作業を進めていく際に、その成果を測る指標となっていきます。

生物相復元については、カワウソが生息しているロシア・沿海州を訪れ、カワウソの生息環境を確認するなど海外事例の収集に努めたほか、国内外のカワウソ研究者を招へいし、岩尾別川を含む知床半島各地の現地視察を行い、意見交換及び一般向けの講演会などを開催しました。

なお、これらの取り組みはダイキン工業株式会社様との協定に基づく財団独自事業として、知床博物館や東京農大など外部の研究者と連携を図りながら進めています。

収	益	事	業
---	---	---	---

収 1 : 収益事業

I. 販売・有償貸出業務

当財団の活動を広く知ってもらうことを目的に、オリジナル商品の開発を行いました。株式会社フェニックス様とのコラボレーション商品、オリジナル T シャツは生産数を増やし 1,000 枚製作、販売しました（メーカーでの販売を含む）。また、今年度も商品価格の 10%をフェニックス様から当財団へ寄附としていただきました。

地元企業のコラボレーション商品として、羅臼の株式会社ケミカルと「鮭節ドレッシング&昆布スープセット」の寄附付き商品を販売しました。オリジナル T シャツと同じく、商品価格の 10%を当財団へ寄附いただける商品で、SEEDS やオンラインショップでも広報し、182 個の売上げがありました。

今年度、オンラインショップ「コムヌプリ」上での注文件数は 167 件でした。また、知床財団個人会員に入会いただいた方は、今年度は、個人終身会員 9 口、900,000 円（昨年度 2 口）、個人年会員新規登録 35 口、175,000 円（昨年度 31 口）、個人年会員更新登録 90 口、450,000 円（昨年度 63 口）あり、オンライン上での手続きが増えてきています。

知床自然センター、羅臼ビジターセンターおよびルサフィールドハウスで、ヒグマ撃退スプレーとフードコンテナの有料貸出を行いました。今年度は、ヒグマ撃退スプレー 213 件、フードコンテナ 6 件を貸出しました。貸出の際には、契約内容や使用方法、ヒグマとの危険な遭遇を回避する方法についてスライド画像を用いて 20 分程度のレクチャーを行いました。また、これまで羅臼岳の岩尾別登山口入口にある木下小屋にも、委託業務としてヒグマ撃退スプレーのレンタル業務をお願いしていましたが、昨年度で終了しました。

知床自然センターで長靴・双眼鏡の有料貸出を実施し、長靴 1,343 件（夏：869 件、冬 474 件）、双眼鏡 51 件の利用がありました。また冬季において、入館促進および来館者の満足度向上のために実施しているスノーシューは、778 件の貸出がありました。

羅臼ビジターセンターでは今年度から長靴のレンタル業務を開始し、33 件の利用がありました。

II. 研修実習受入業務

道内外の各種団体から依頼された講演、レクチャー、行政視察等に対応することにより、知床の価値を紹介、または、知床財団の持つ野生動物保護管理や調査研究、公園管理、環境教育のノウハウを広く提供・共有する活動を行いました。

昨年度研修・講演・視察対応等受け入れ実績

講演	平成 26 年度標津建設技術研究会（上田組）
	西武学園文理小学校 4 学年（近畿日本ツーリスト株式会社 埼玉教育旅行支店）
	アイヌ工芸品展「アイヌの工芸-東北のコレクションを中心に-」（公益財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構）
	日本獣医学会学術集会
	エゾシカ広域捕獲技術研修会（北海道庁環境局エゾシカ対策課）
	電機連合（東芝ツーリスト株式会社）
	駒場東邦高等学校（株式会社 JTB コーポレートセールス教育第一事業部）
	北海道科学大学環境特別講演会（北海道科学大学環境マネジメント委員会）
	定例観察会「晩秋の自然を楽しむ音楽と語り」（野付半島ネイチャーセンター）
	ワイルドライフマネジメントフォーラム in 札幌
	根室管内町議会議員
視察 対応	鹿児島県奄美市議会文教厚生委員会
	八王子市議会議員
	長野県大町市議会総務文教委員会
	大分県議会総務企画委員会
	埼玉県深谷市議会「深和会」
	山梨県農政産業観光委員会委員
研修 実習 受入	鳥獣保護管理の在り方検討のための現地調査（環境省）
	横浜国立大学理工学部
	北海道大学 獣医学部
	酪農学園大学 環境システム学部 生命環境学科
	北海道小清水高等学校
	日本赤十字北海道看護大学
特別講 義・検討 会委員 など	東京農業大学アグハブ学学科講義
	北海道大学獣医学部獣医学概論講義
	知床学士認定制度運営委員会委員
	指定管理鳥獣捕獲等事業に関する検討会委員（環境省野生生物課）
	エゾシカ保護管理検討会委員（北海道庁環境局エゾシカ対策課）
	エゾシカ対策推進委員会委員（北海道庁環境局エゾシカ対策課）
	エゾシカ捕獲計画検討会委員（釧路振興局）
	農水省鳥獣害対策基盤支援事業（対策手法確立調査・実証事業）に係る検討委員会委員

他 1 : その他の事業

I. JBN業務

日本クマネットワーク（JBN）からの受託業務として、JBN 会員向けニュースレター「Bears Japan」の発送、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」の発行・販売、JBN ホームページの運営管理を行いました。年 3 回発行の JBN 会員向けニュースレター「Bears Japan」は会員や関係機関に、のべ 975 件発送しました。また、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」については、店頭および通信販売を通じて計 66 部を販売しました。ホームページについては、日常的な掲載内容の更新を中心に、幅広い運營業務を JBN 事務局と連携して実施しました。

日本クマネットワークは、個人や地域ごとの単独の活動だけでは難しい全国レベルの諸問題や国際問題に関し、必要に応じて社会に対して働きかけを行い、人とクマのより良い関係を構築する活動を行っている NGO 組織です。会員は専門家やクマに関心を持つ一般市民、およそ 350 名で構成されています。

法	人	会	計
---	---	---	---

法 1 : 財団法人管理運營業務

I. 財団法人管理運營業務

理事会は、第 1 回理事会（5 月）を開催し、「平成 25 年度事業・決算報告及び、特定費用準備資金積立」について審議しました。第 2 回理事会（5 月）は、「代表理事の選出」を行いました。第 3 回理事会（7 月）は、決議の省略の規定により第 1 回理事会で提案した、「第 2 号議案 平成 25 年度決算報告について」修正決議されました。第 4 回理事会（10 月）は、「臨時評議員会の招集について」及び「賛助会員の入会承認について」審議しました。第 5 回理事会（12 月）は、「賛助会員入会承認について」及び、「平成 27 年度事業計画の素案について」審議しました。第 6 回理事会（3 月）は、「平成 27 年度事業計画・予算等について」審議し、年 6 回開催しました。定時評議員会（5 月）は「平成 25 年度損益計算書及び貸借対照表について」及び「理事・監事の選任について」審議しました。臨時評議員会（7 月）を開催し、決議の省略の規定により定時評議員会で提案した、「第 1 号議案 平成 25 年度損益計算書及び貸借対照表について」修正決議されました。第 2 回臨時評議委員会（12 月）は、「定款の一部変更について」審議しました。他、代表理事と事務局の年 2 回以上開催が義務づけられている運営会議を 9 月と 3 月に開催しました。その他、理事会評議員会の開催時に事務局会議を行い、3 月には今後 5 年間の「中期的経営収支の試算」を作成しました。